第6回 AUI研究会の記録

日時: 2014 年1月10日（金）17:30-19:30
会場: 早稲田大学 19 号館 713 会議室
司会: 松岡俊二（早稲田大学アジア太平洋研究科教授、AUI推進機構理事長）
スピーカー: 田中恭一（公益財団トヨタ財団シニアプログラムオフィサー）
コメンテーター: 北村友人（東京大学大学院教育学研究科准教授）
テーマ:「AUI構想の具体化に向けて–アジアの未来社会をデザインする人材育成とは–」
出席者: 15名
記録: 龍原　梢（早稲田大学アジア太平洋研究科修士 1 年）

1. 概要

報告では、田中氏より、トヨタ財団における「研究助成」、「東南アジア・プログラム」、「地域社会プログム」等の助成プログラムの企画•運営業務を通じた国内外研究者、NGO、政府関係者との異文化接触における経験をふまえ、標題(テーマ)の問題提起があった。アジア協働大学院(AUI)構想に向け、アジアの未来社会をデザインする人材としてふさわしい資質や態度についてが主な報告内容であったが、AUI 構想に向けた今後の研究、調査のあり方についての提案もあった。これを受けて、コメンテーターの北村氏より、将来の日本の高等教育機関の国際化及びグローバル人材育成に向けた、アジアの高等教育機関の国際化およびグローバル人材育成のための日本の役割についてのコメントをいただきアジアにおける日本の高等教育機関のあり方について、参加者で議論した。

2. 報告要旨

「社会をデザインしていく際、ステークホルダー間での多様性を認め合うことが重要である。その関係性は合意形成につながり、結果的に持続性、柔軟性をもった社会を形成することになる。このことが様々な社会的課題を解決することを可能にする」という仮説に基づき、多様性を認め合う態度を持つ人材が、地域（アジア）益を優先し、アジアにおける 21 世紀型社会モデルをデザインできる人材となるのではないかと考える」。つまり、この仮説に立てば、地域益を第一義とする姿勢を持ちつつ、アジア地域協力の未来を担う社会モデルをデザインできる専門的人材の育成という AUI 構想の目的を実現できる。

この仮説は、「演繹的」なアプローチからも導き出せるのではないか。つまり、多様性を認め合う態度を持つ人材とは、真善美を備える人である。真善美とは、「認識上の真と、倫理上の善と、審美上の美と普遍妥当な価値」（広辞苑）および「人間の理想である、真と善と美。それぞれ，学問・道徳・芸術の追求目標といえる三つの大きな価値概念」（大辞林）のことと定義する。ここで、真とは、文系知と理系知の専門家と市民社会との協働からうまれる知識という学問としての総合知を指す。善とは、アジア地域の公共益を国益より優先する心、姿勢等道徳的なもの。そして、美とは、相手の感性に働きかけ共感を得ることを可能とする資質であるため、芸術文化をさすのではないか。

なお、真や美は、座学によって、ある程度は習得可能である。一方で、善は座学でというよりも経験によって培われるものであり、より公共心を育み、アジアにおける地域益をもたらす鍵要因ではないか、と考える。従って、多様性を認め合う態度を持つ人材の育成という AUI の構想においては、特に善を育む教育機会を提供することが鍵となる。また、多様性を踏まえた文理社会協働による総合知に関する研究および調査は、AUI でのカリキュラムを考える上で必要となる。同様に、多様性を認め合う態度を持つ人材として相手の感性に働きかけ共感を得るための美的な資質に関しても、その習得のための効果的なテク

ニックに関する調査研究を行うことも意味はある。

多様性を認め合う態度を持つ人とは、先入観を持たずに相手のことを見て、理解することができる人のことではないかと考える。先の「多様性を認め合う態度を持つ人材が、地域益を優先し、アジアにおける 21 世紀型社会モデルをデザインできる人材となるのではないか」という仮説は、多くの具体的事例から導き出しているが、ここでは、アトリエ・インカーブおよび 90 歳ヒアリングという 2 つの団体による事例を紹介する。

今中博之氏が代表を勤めるアトリエ・インカーブは、指定生活介護事業所である福祉施設で、在籍する知的障害者をアーティストと位置づけ、彼らの創作活動の環境を整え、独立することを支援している。彼らは、知的障害者という福祉的な含意を超えて、アーティストとして作品のオリジナリティに対する高い評価を受けており、結果としてアトリエ・インカーブが知的障害者の経済的自立に貢献している。今中氏が主張している「観点変更」という視点は、まさに「先入観を持たずに相手のことを見て、理解すること」で、そのことが活動を成功に導いている。

次に、90 歳ヒアリングは、90 歳前後の高齢者が持つ低環境負荷の暮らしの知恵や技術を通して、昔の暮らしの知恵や自然と共生するライフスタイルを応用し、新しいものづくりや社会システムの形成に活かし、将来のまちづくりへの提案とすることを目的としている。高齢者とは決して先入観で接するのではなく、知識、過去の経験を豊富に有した先人と捉え直し接しているので新たな知識を獲得することを可能としている。ここにも、ある種の「観点変更」が存在している。

今後は、「東日本大震災での支援活動」（地域益）、「国際的な課題解決を目的とした協力活動」（地球益）、「社会企業家による事業」（社会益）等の実在する事例を参考としつつ生が多様性を認め合うことを体現できるようなカリキュラム作りのためのヒントを探していきたい。例えば AUI のカリキュラムの中に、1 年間のフィールドでの実践を組み込み、そこでの知見を持ち寄り、他の学生と議論するという協働作業の経験をビルトインすることも一案である。つまり、学生が多様性を意識せざるを得ない環境を創り出す、そのための仕掛けづくりは非常に重要である。

3. コメントおよび総合討論

アジアでの国際的な高等教育機関としての AUI 構想の具体化に向け、アジア地域の多様性と相互交流に根ざした人材育成を考える必要がある。また、日本が主体的な役割を果たしながら、高等教育の国際化とグローバル人材育成を進めていく取組には、大きな可能性を秘めている。日本の高等教育機関が主体となってアジアの大学の国際化を進めていく意義は、日本の高等教育機関が持つ「学問の自由」や「大学の自治」といった高等教育機関における公共財をアジアに発信していくことではないかと考えられる。

研究的な側面を踏まえながら、高等教育機関の現代的なニーズや国際的な水準に対応し、国内外のネットワーク活用することで、真善美を持ち合わせた人材を育成し、研究者としての研究能力の向上につなげることができる。日本の高等教育の国際化とグローバル人材育成を AUI 構想が推進する過程には、国家レベルや大学レベルで合理的な動機を示唆することができ、日本の大学にとって国際貢献や国際的プレゼンスの向上に貢献する可能性を有している。

具体的には、グローバル人材育成プログラムの今後の展開に対して、学術面と実践面のバランスを考えた国際教育プログラムの開発を進めていくことが重要であろう。そうすることにより、学生の現代的学習ニーズへの対応と国際水準での教育の質の向上という成果が期待できる。また、アジア域外の大学や国際ネットワークとの連携による大学間の国際連携を活発化させることにより、グローバルな課題に対する国際連携の可能性を示唆し、高等教育機関の国際ネットワークとの連携を深化させることにつながる。また、高等教育機関におけるグローバルな課題に関する研究能力の向上に資するものでもあり、地球規模の課題についての実践的なオリエンテーションを有する研究者育成という長期的な成果を

可能とする。

さらに、被援助国である東アジアのパートナー諸国の資金的状況を踏まえると、国際協力としての高等教育機関のあり方が問われる。高等教育機関の国際協力は、知識創造としての知的交流型と教育協力としての開発援助型に分類できる。しかし、昨今の国際協力の実体は、この 2 つの分類に明確に区分することが困難であり、今後、高等教育機関は、パートナーから便益を受ける側、パートナーに対する資金援助をする側の相互の協力体制の成立を考える必要がある。こうした知的交流と開発援助が一体化した知的開発協力が、地域益の実現につながるであろう。

知的開発協力による地域益を実現する例として、科学技術振興機構（JST）と国際協力機構（JICA）が共同で実施している SATREPS がある。SATREPS は、現在、我々が直面している地球規模の課題に対して、日本と開発途上国の研究者が共同で研究を行うための研究協力プログラムである。日本の研究者の知と途上国の研究者のローカルな知を融合させ、新しい知見を獲得し、多様性を踏まえた文理社会協働による総合知を実現することができるかもしれない。知的開発協力の実践として、日本と開発途上国の共同研究体制を推進し、実際の課題解決に貢献する SATREPS をはじめとするプログラムを AUI のカリキュラムのフィールドワークに活用することも一つの案として考えられる。

アジア地域で AUI 構想における高等教育機関を創設するにあたり、日本の我々が果たす役割は、地域益を追求していくことではないか。地域益を追求するためには、「持続可能な開発」という共有概念が存在するが、そこに普遍的な教育モデルはない。しかしながら、現在、地球規模の先進国と途上国のどちらにとっても等しく重要な課題があり、これを実現するには、社会の歴史・伝統に根ざした固有の文化を重視すること、多様性を認めること、差異を受け入れる寛容性や対話を重視する教育が必要である。また、ローカル（あるいは土着的）な知の活用し、多様な文化的アイデンティティを反映した教育のあり方（言語、宗教、民族など）を確立することにより、AUI 構想を通して、アジアにおける人的・組織的・制度的な能力開発を向上させていかなければならない。また、アジアにおける高等教育機関としての AUI は、日本の高等教育機関が歴史的に確立してきた「学問の自由」や「大学の自治」といった価値観を示していくことが必要である。